

【史料紹介】

『点石齋画報』に見える科挙関連記事——その二「科挙の厳しさ」

湯城 吉信

前号から、『点石齋画報』に見える科挙関係記事の紹介を始めた。前回は、科挙の荘厳さが見える記事を紹介したが、今回は、科挙の厳しさが見える記事三則を紹介し、合わせて科挙の合格・不合格を詠む登科詩・下第詩を紹介する。

科挙は、地方試（童試から郷試まで）から中央試（会試・殿試）まで段階を踏む必要があり、郷試以上は三年に一度しか行われなかった。郷試に合格すると「举人」と呼ばれ、官僚となることが保証されたが、その合格率は極めて低く、平均年齢も三十歳を超えていた。

清朝においては、初期は、新しい漢人官僚を採用するために比較的定員が多かったが、支配が確立してからは削減された。例えば、会試の合格者は、最大四百名ほど

いたが、康熙帝以降は二百名未満が常態になった。^(註)

前回同様、題名の後のカッコ内の年月日は、各記事の発行年月日である（『点石齋画報通検』（香港・商務印書館、二〇〇七年）による）。文章の後にある「」は閑章（印章の形による一言コメント）である。原文の句読点は、『点石齋画報全文校点』（香港・商務印書館、二〇一四年）を参考に適宜改めた。

（注）劉兆瓊『清代科挙』（東大図書公司、一九七七年）などを参照。その他、王戎笙主編『中国考試史文献集成』巻六（清）（高等教育出版社、二〇〇三年）の第二編「科挙考試」第三章「考試和評卷」第六節「定額和中額」には、清代の科挙の定員と合格人数についての史料

がまとめられている。

①「科場果報」(試験場での報い)(戌集、大可堂版二一六

一、一八八五・一〇・一三三)

*精神を病み自傷した人がいたこと。

【原文】三載賓興、三場試畢。疇不作掄元想、然而文章學問、屈抑恆多、即朱衣無如才人何也。士先器識而後文藝、舍陰鷺、更無功名。隱慝未可告人、即冥誅難邀寬典。祇如浙闈二場、十二日五鼓時、西文場某號內某上舍生、自取小刀、猛劊其腹、縱橫上下數十回。號軍稟號官、號官稟提調、至頭牌開放時、飭二兵扶挾回寓。雖膺慘報者不止此一人、而此一人則衆目共見者也。諱某姓名而存其事、爲有志上進者勸。 閑章「慘亡」

【大意】三年に一度の郷試の三度の試験が終わった。もともと、状元を目指したものはなかるうが、文章や学問は鬱屈することが多く、高官も才人を取り上げることができないわけではない。士人は見識才能が第一で文芸はその次だ(さほど重要ではない)。陰徳なくして功名も

科 場 果 報



ない(隠れた徳を積んでこそ出世できる)。隠れて悪さをしていると、罰が当たることは避けられない。

浙江省の試験場の第二場で、十二日未明、西文場の某

号内の某受験生が、自ら小刀を取り出し、自分の腹を切り、縦横上下に数十回刺した。監視員が監督官に報告し、監督官が試験副長官に報告し、試験開始時に、二人の兵に命じて宿へ返させた。悲惨な報いを受ける人はこの人だけではないが、この人は衆目の知るところとなった。その姓名を伏してその事件を記し、科挙合格を目指す人の戒めとする。（「悲惨な死に方」）

【注】○資興 もともと、周代の人材登用法を言うが、ここでは科挙の郷試のこと。○三場 科挙は三段階に分かれ、第一場で経義・四書義、第二場で論、第三場で策というふうに分かれていた。○掄元 科挙のトップ合格者。○朱衣 高官。仕官（科挙に合格すること）。○陰鷲 陰徳。○隱隱 隠れた罪。○寛典 寛大な待遇。○五鼓 夜を五つに分けたもの。ここではその五番目の五更を指すか。○劊 割く。○號軍 試験の監視員。○提調 郷試の長官を監臨と言い、その下に監試と提調がいた。○頭牌 最初の一群。

【解説】この記事では、悲惨な結果になったのはその人の過去の行いに問題があったからであるという因果応

報論で書かれている。そこには、本人への同情はなく、読者の教訓を目的として書かれているのである（タイトルにもそれが表れている）。これは当時極めて一般的な書き方である（精神に変調を来した人はだいたいこのような扱いをされている）。六一一八八にも「科場果報」というタイトルの記事がある。

【余説】この試験においては、答案筆写係官が（おそらく）コレラに集団感染し、六、七十人も亡くなり（①）、附随して答案一つが紛失する（②）など問題が多発したようだ。

①『申報』一八八五・一〇・二三（四四九〇号、二面）に「浙闈謄録房中、自曹姓謄頭死後、相繼而亡者、共六七十人：（浙江省の試験会場の答案筆写場で、曹という長が亡くなってから、相次いで亡くなる者が、計六七十人に達した：）」という記事が見える。試験採点会場において感染症が集団発生したのである。

②『申報』一八八五・一〇・一八（四四九五号、二面）の「闈事餘譚」（試験余聞）に以下のようにある。

「浙闈謄録房中、病疫死者不下數十人、患瘋者更不知

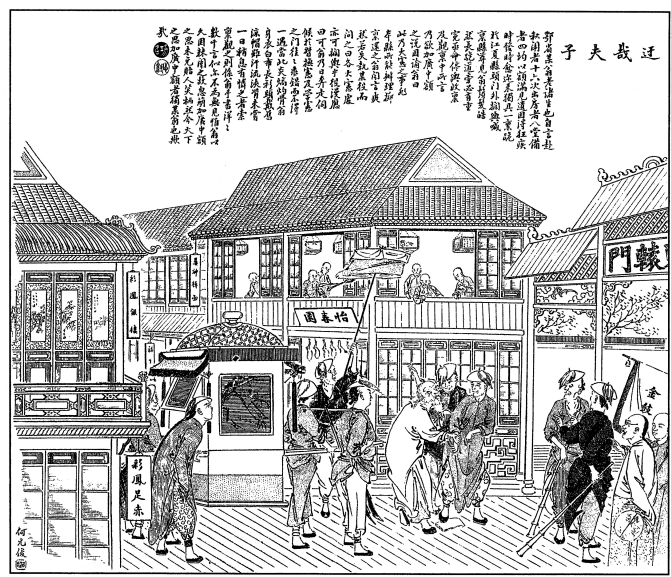
凡幾。且書手較往年爲少、而實策則較往年爲多、以致二三場卷皆不能認真傳聞、二場中失去一卷。尋覓兩日一夜、絕無蹤跡、不得已稟知所官共拜狐仙焚香禱告。次日、果尋得其卷於長桌之上、一言無損。三場卷、已於初四日、一律告竣。夜間即可掃場、初五日、即將書手放出。」

②「迂哉夫子」(迂闊なことよ、夫子様)(革集、大可堂版)

一〇一八三、一八九三・八・一七

*ずつと落第している老童生が定員増加を訴えたこと。科挙受験の年齢制限はなかったが、官僚は七十歳が定年であり、合格しても仕官することはできなかった。ただし、名誉のために受験する人はおり、朝廷もそれを表彰した(宮崎市定『科挙史』(平凡社〈東洋文庫〉四七〇)一六五頁「七十歳以上の受験生は老生と称し、会試の際に特別の班を成す。…表彰を受けることもあったと言ふ」)

【原文】鄂省某翁、老諸生也。自言赴秋闈者十六次、出



房者八、堂備者四、均以額滿見遺。因得狂疾、時發時愈。邇來獨具一稟、跪於江夏縣頭門外、攔輿喊稟。縣尊見翁鬚髮皓然、長跪道旁、必有重寃、亟命停輿收稟。及

觀稟中所言、乃欲加廣中額之說。因諭翁曰、「此乃大憲之事、非本縣所能辦理。」擲稟還之。翁聞言、爽然若失、執某役而問之曰、「各大憲處亦可攔輿乎。」役漫應曰、「可。」翁乃日奔走伺候於督、撫憲及學憲之門、往往乖錯而不得一遇。當此炎燭灼骨、翁身衣白布長衫、頭戴舊涼帽、雖汗流浹背、未嘗一日稍息。有憐之者索稟觀之、則係翁手書洋洋數千言、似亦不爲無見。惟翁以久困棘闈之故、忽萌加廣中額之思、未免貽人笑柄。然今天下之思加廣中額者、獨某翁也歟哉。

閑章「功名」「心熱」

【大意】湖北省の某翁は、老書生だった。自ら言うところでは、秋の郷試に十六回応募して、八回合格候補になり（房考官の審査を通り）、四回補欠合格者（「堂備」）となったが、すべて定員が埋まっているということ採用されなかった。そのため、心の病になり、良くなったり悪くなったりを繰り返した。その後、一つの上奏書を携え、江夏県（現武漢市の地名）の正門の外に跪き、知県の輿を遮って上奏した。知県は、鬚も髪も真っ白な老人が、長く道端で跪いているのを見て、きつと大きな怨み事があるのだろうと思ひ、急いで輿を止め上奏を受け

取るよう命じた。上奏書の内容を確認すると、合格者を増やしてほしいということであった。そこで、翁を諭して「これは、大憲（総督・巡撫）の仕事で、県レベルで処理できることではない」と言い、上奏書を投げ返した。翁はその言葉を聞いて、茫然自失し、役人を捕まえて、「大憲の所でも輿を止めることができますか」と聞いた。役人は適当に「できる」と答えた。そこで翁は毎日、総督・巡撫と学憲（提督学政）各省の教育行政の長官（の門に至ったが、しばしば行き違いで会うことができなかった。猛暑の中、翁は白く長い着物を着て、頭には古い涼帽をかぶり、びっしょりと汗をかいて、一日も休むことがなかった。憐れに思った人が、その上奏書を見てみると、翁が手書きした数千言の文章で、見識がないものではなかった。ただ、翁は長く科擧に苦しんだために定員を増やすことを思いついたがために、笑いものになることは免れなかった。だが、今の世で定員を増やしてほしいと思う人は、ただこの翁だけであろうか。

（「功名心が強い」）

【注】○爽然 茫然。○出房 郷試・会試で房考官が合

格候補の解答用紙を主考官に推薦する。この房考官の審査を通ることを「出房」と言う。その後、主考官の審査を通れば合格となる（楊学為主編『中国考試大辞典』（上海辞書出版社、二〇〇六年）一〇六頁「郷・会試房考官閱卷後、將擬取中之卷推薦給主考官由其定奪。凡推薦之卷俗名「出房」」。○堂備 補欠合格者のこと（翟国璋主編『中国科挙辞典』（江西教育出版社、二〇〇六年）一五五頁）。○涼帽 笠状の帽子。清朝の一般的な役人の帽子。○棘闈 科挙の試験場。

【解説】この記事では、老人をばかにしているようだが、同情も示している。また、老人は才能がなかった訳でもないようだ。才能はあったが浮かばれなかった点はちよつと中島敦『山月記』の李徴に通じるか。このような老受験生は少なくなかったであろう。

【参考】熊慶年『中国古代科挙百態』（中国古代社会百態）第一輯、東方出版中心、一九九七年）四五頁「百歳老翁亦観灯」。



③「猶有童心」（今なお童心あり）（金集、大可堂版八一二〇三、一八九一・九・二八）

*老人の受験生がいたこと。

【原文】昔有老童應試、於卷中夾以紅箋、題詩相干曰、「老漢今年八十三、白衣猶未染成藍、身披 皇賞蒙恩賜、不入鬢宮死不甘。」及出案、果蒙取錄。衡文者並批以寶塔詩曰「翁、古董、老運通、白髮蓬鬆、姜太公令兄、新進童生祖宗、身披 皇賞領花紅。」笑林所載、雖非實事、然可見一領青衫固有取之非易者。今屆江蘇學憲楊蓉圃少廷尉科試金陵時、童子軍中、厥有五老介乎其間、蒼顏白髮、態甚龍鐘。諸童見之、群聚譁觀、而五老則捩髭自顧、嗤衆雛之無知。及發落時、其著青衫而領花紅者、皆係翩翩年少、則知此五老又皆落孫山以外。老運不通、五老殆有同慨歟。

閑章「老夫」「髦矣」

【大意】昔、老童生（科挙の受験生で合格していない人）が、解答用紙に挟んだに赤い紙きれに、以下のような詩を書いていた。

老漢今年八十三（老人の私は今年八十三歳）

白衣猶未染成藍（白い服をまだ藍色に染めることができない。） *合格して仕官できない。

身披 皇賞蒙恩賜（身に皇帝のご恩を帯び、恩賜を蒙

り） *受験させてもらうことを言う。

不入鬢宮死不甘。（学宮に入るまでは死んでも死にきれない。）

採点されると、果たして合格であった。採点者は、宝塔詩でコメントして言った。

「翁、古董、老運通、白髮蓬鬆、姜太公令兄、新進童生祖宗、身披 皇賞領花紅。」

（翁は、骨董ながら、老運が通り、白髪頭はばさばさ、太公望のお兄様で、新進の童生の祖先だ。身に皇帝の賞をまとい、合格通知を受け取る。）

これは、『笑林』（笑話集、『笑林広記』など「笑林」を冠する書物はいくつもあるが、これが特定の書籍を表すかどうかは未詳）が載せる話で実話ではないが、合格して書生になるのは簡単ではないことを表している。

今回の江蘇省の学憲（学政）教育長官・楊蓉圃が金陵（南京）の試験を監督した時、童生の中に、五人の老人が混ざっており、顔は蒼白で白髪で、よぼよぼであった。他の受験生はそれを見て、集まって騒いだが、五老人は鬚をひねって何食わぬ様子で、世間知らずの若造を笑った。合格発表の時、青い服を着て合格通知を得たの

は、みな元氣な若者で、この五老人がまたも不合格だったことがわかった。老運が通らず、五老人は同じく嘆いているであろう。（優れたり、老人）

【注】○衡文 文章を品評すること。ここでは科挙の試験の採点をするを言う。○宝塔体 遊戯詩の詩形の一つで、一言から始まって七言二句の構成で終わる。一七体、階梯体、宝塔体とも言われる。○姜太公 太公望呂尚。周の軍師。老いて世を避け釣りをしていたところを文王に登用された。○青衫 青い服。書生・下級官吏の着る服。○楊蓉圃『清代職年表』四「学政年表」二七四八頁によれば、一八八八〜一八九〇年の江蘇学政は楊頤である。楊頤（一八二四〜一八九九年）、字は子異、号は蓉浦、広東茂名県（今の高州市）城西広潭村人。○龍鐘 老いて行動が不便な様子。○花紅 ここでは合格通知だろう。普通は、祝い事を表す赤いリボン、祝いの通知を言う。○落孫山 「名落孫山」で試験に落ちること。宋代の孫山が同郷人とともに挙人の試験に参加した。合格者発表の時、いちばん最後に孫山の名があった

が、同郷人の名はなかった。その試験結果を聞かれた孫山は、「解名尽处是孫山、賢郎更在孫山外（合格名簿の最後に私の名があり、友だちの名はその外にありません）」と答えた。宋・范公偁『過庭録』第六九節に見える。

【参考】この記事に見える宝塔詩は、『申報』一九四七・六・一七（二四九〇五号、九面「旧詩抄」）に以下のように見える。「…清代有童生年且七十、猶未入學。督學法某憫其老、於是恩給一秀才、並作寶塔詩曰、「翁、古童、時運通、白髮蓬鬆、是太公的令令兒。」語雖諱、亦可見科場之辛酸也。」（*太字は、本文の記事との異同。）民間に伝わるもので異同があるのであろう。

【解説】科挙の受験生には年齢が高い人が少なくなかった。唐代の諺にすでに「五十少進士」（五十歳で進士になるのは若い方）というものがあつた。

老人になつて科挙に合格した人の有名な例として、南宋時代の詹義が書いた「登科後解嘲」と題する詩がある。ちなみに、科挙の合格を扱う詩を「登科詩」と言う。

「登科後解嘲」 宋・詹義（cf井波律子『中国名詩集』岩波書店）

讀盡詩書五六擔、読み尽くす 詩書五六担、
老來方得一青衫。 老來、方めて得たり 一青衫。

佳人問我年多少、 佳人我に問う 年の多少を、
五十年前二十三。 五十年前 二十三。

（多くの経書を読みつくし、老人になってようやく官吏になることができた。佳人に年を聞かれれば、五十年前、二十三と答えよう。）

【注】○青衫（せいさん） 青い色の着物。ひとえの短い衣で、地位の低い官吏の着る服。また、若者。書生。

なぜ、このように苦勞して受験し続けるかというところ、合格すれば世界が一変するからである。そのことを表す以下のような表現がある。

朝爲田舎郎、暮登天子堂。（宋・汪洙「神童詩」〔三字経〕と並び称される童蒙書（幼学書））

（朝には田舎の野郎だったが、暮れには天子のお堂に登

る。）

十年窗下無人問、一舉成名天下知。（元・高明『琵琶記』第四出「蔡公逼試」）

（十年間、誰にも知られていなかったが、一度有名になると天下中に知られる。）^(注)

（注）その他、科挙で合格するとすべてが得られることを詠む詩に、宋・真宗作「勸学文」〔古文真宝前集〕所収）がある。

「勸学文」 宋・真宗

富家不用買良田、書中自有千鍾粟。

安居不用架高堂、書中自有黃金屋。

出門莫恨無人隨、書中車馬多如簇。

娶妻莫恨無良媒、書中有女顏如玉。

男兒欲遂平生志、五更勤向窗前讀。

逆に、科挙に落ちた時のショックも相当のものであり、科挙に落ちたことを題材にした「下第詩」も多く残

されている。主に、一海知義『漢詩一日一首』（平凡社、一九七六年）を参考に、唐代のものであるが、以下、六首を紹介する。

①「戲題關門」（戯れに関門に題す）唐・岑参（*三十

歳で科挙に合格した。）（『全唐詩』巻二〇一）

來亦一布衣 來るも亦た一布衣

去亦一布衣 去るも亦た一布衣

羞見關城吏 羞ずらくは関城の吏を見んことを

還從舊路歸 還た旧路より帰れり

（來る時も無官の布衣で、去る時も無官の布衣。関所の

役人に会うことは恥ずかしいが、同じ道を帰るしかな

い。）

【注】○布衣 木綿の着物、また、それを着た無官の庶

民を言う。

②「落第長安」（長安に落第す）唐・常建（『全唐詩』卷

一四四）

家園好在尚留秦、 家園は好在なるも 尚お秦に留ま

り、

恥作明時失路人。 明時 路を失いし人と作るを恥ず。

恐逢故里鶯花笑、 故里の鶯花の笑いに逢うを恐れ、

且向長安度一春。 且く長安に向いて一春を度さん。

（故郷の家は無事だがなお長安に留まり、この公明正大

な良き世に道を失った人になるのを恥じる。故郷の鶯や

花に笑われるのが恐いので、長安でまたこの春を過ごす

ことにしよう。）

【注】○秦 都長安の別名。○笑 花が咲くことを「笑」

とも言う。

③「落第」唐・李廓（『全唐詩』卷四七九）

榜前潛制淚、 榜前 潜かに涙を制し、

眾裏自嫌身。 眾裏 自ら身を嫌う。

氣味如中酒、 氣味 酒に中れるが如く、

情懷似別人。 情懷 別人に似たり。

暖風張樂席、 暖風 樂席を張り、

晴日看花塵。 晴日 花塵を看る。

盡是添愁處、 盡く是れ愁いを添うる處、

深居乞過春。 深く居りて 春を過ごさんことを乞う。

(合格発表の掲示板の前では涙を我慢し、衆人の中ではいたたまれない。気分は悪酔いしたようで、気分は別の人になったようだ(「人に別れる」という解釈もある)。暖かい風の中で宴会をしても、晴れの日に花を見ても(以上、二句は一海知義は合格者のことだと言う)、すべてが愁いを増すことにしかならず、家にこもって春が早く過ぎてくれと祈る。)

④「再下第」(再び下第す) 唐・孟郊 (*四十六歳でようやく進士になった。)(『全唐詩』卷三三四)

一夕九起嗟、 一夕 九たび起きて 嗟き、

夢短不到家。 夢は短くして 家に到らず。

兩度長安陌、 兩たび度る 長安の陌、

空將淚見花。 空しく涙を將て花を見る。

(一晩に九回も起きて嘆く。夢は短く家にもたどり着けない。二度、長安の道を踏んだが、ただ空しく泣きながら花を見たただけだ。)

⑤「落第歸郷留別長安主人」(落第し帰郷し、長安の主人に留別す) 唐・豆盧復 (『全唐詩』卷二〇三)

客裏愁多不記春、 客裏 愁い多く 春を記さず、

聞鶯始嘆柳條新。 鶯を聞きて始めて嘆く 柳条新た

なるを。

年年下第東歸去、 年々下第し 東に帰り去り、

羞見長安舊主人。 長安の旧き主人を見るを羞す。

(旅先では愁いが多く、春を感じたことがない。鶯の鳴き声を聞いて初めて柳の新芽が出てきたのだと驚く。毎年落第して東に帰るが、長安のなじみになった宿の主人に会うのが恥ずかしい。)

⑥「長安落第」(長安に落第す) 唐・錢起 (『全唐詩』卷

二二九)

花繁柳暗九門深、 花繁く柳暗きも 九門は深く、

對飲悲歌淚滿襟。 對飲悲歌して 涙襟を満たす。

數日鶯花皆落羽、 數日鶯花皆な羽を落とし、

一回春至一傷心。 一回春至れば一たび傷心す。

(花は盛んで柳は茂るが、天子の門は奥深く(入るのが

難しく、酒を飲み悲しく歌い涙で袖を濡らす。ここ数日、鶯や花が終わりを迎え、一度春を迎えると一度心を痛めることになる（春は私にとって傷心の季節だ。）

参考文献

* 今回特に参照したものを。登場順。

葉漢明、蔣英豪、黃永松編『点石齋画報全文校点』

（香港・商務印書館、二〇一四年）

葉漢明、蔣英豪、黃永松編『点石齋画報通檢』

（香港・商務印書館、二〇〇七年）

劉兆瓊『清代科挙』

（東大図書公司、一九七七年）

王戎笙主編『中国考試史文献集成』卷六（清）

（高等教育出版社、二〇〇三年）

楊学為主編『中国考試大辞典』

（上海辞書出版社、二〇〇六年）

翟国璋主編『中国科挙辞典』

（江西教育出版社、二〇〇六年）

熊慶年『中国古代科挙百態』

（中国古代社会百態）第一輯、
東方出版中心、一九九七年）

錢実甫編『清代職官年表』卷四

（中華書局、一九八〇年）

一海知義『漢詩一日一首』

（平凡社、一九七六年）

周嘯天主編『唐詩鑑賞辞典（補編）』

（四川文芸出版社、一九九〇年）